第47回 企画展

千客万来！招き猫

藤枝練人形　102年ぶりに復活

「藤枝招き猫」（明治前期）に使われていた原型
昭和初期には廃絶していた熱田招き猫（土製・名古屋市）と同型

藤枝市郷土博物館

平成12年９月８日（金）～10月25日（水）

藤枝招き猫に使われていた原型（明治時代前期）

志太地域には「志太天神」に代表されるように、すでに江戸時代末期からおがくずを糊で固めた練り物の雛人形作りが知られており、こうした伝統を引き継いで旧藤枝宿を中心に明治時代には盛んに人形作りが行われていたことが明らかになってきました。

全国的な土人形の衰退とともに、明治31年ころを最後に藤枝練人形も忘れられていましたが、102年ぶりに左手をあげて客を招く「招き猫」が姿を現しました。

招き猫（大）の原型と雌型

招き猫「中猫」の雌型と原型

招き猫「小猫」の雌型

藤枝で作られていた練人形と招き猫

全国の郷土人形の中で藤枝において「招き猫」を含んだ練人形が作られていたことは、今まで全く知られていませんでした。平成６年、旧長楽寺町の「藤枝だるま」店から、ダルマ木型や半製品の保管に使われていた土蔵の中から茶箱に納められた木型が多数発見され、藤枝で練人形が作られていたことが明らかになりました。

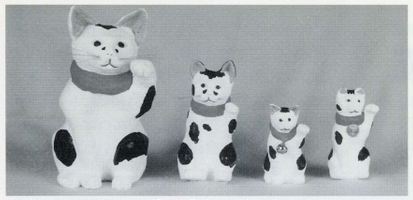
創業者と伝えられる内田七五郎は文化10年（1813）多くの職人が集まっていた藤枝宿白子町の生まれで、いつごろから人形作りを始めたか明らかではありませんが、小型の一文人形の原型や翫物商鑑札を転用した雌型を残しているところから、江戸時代にはすでに人形製作が行われていたものとみられ、土人形が流行した明治時代にかけて盛んに製作していたことが明らかになってきました。二代目利吉、三代目作太郎と人形作りは受け継がれましたが、明治31年（1898）ころを境に藤枝張子ダルマの製造が中心となって、練人形作りは廃絶しました。

一文人形系の小型座り猫・招き猫原型（木彫・明治時代初期）

各地の影響受け、多様な型

発見された練人形の木型（雌型）や原型は大変保存が良く、廃絶した時の状況をよくとどめています。木型（雌型）の多くは七五郎と利吉の使ったもので、天神、童子、ぶら人形、鯛、獅子頭、犬、いなり狐、虎、招き猫など22種44点があり、松ヤニや滑石の粉を使った剝離剤がそのまま残されています。型取りに使用した木彫や土人形の原型も残されており、ぶら人形、童子、馬、犬、招き猫など28種44点が揃っています。

人形の系譜は、各地の産地での人気の題材が取り入れられており、江戸時代以来の小型人形として作られた一文人形系のもの、伏見人形につながる関西系の影響を受けたもの、今戸人形に代表される江戸玩具や鴻巣人形の赤物などの関東系のもの、静岡張子などにみられる在地の題材のものなどに分けられ、かなりバラエティーに富んだ内容となっています。藤枝宿白子町の商家や職人の活躍、明治時代になって盛んになった雛人形師や桐箪笥職人などの交易も藤枝練人形の題材に反映されているものとみられます。



廃絶してから102年ぶりに雌型から型抜きした招き猫
（復元品の製作は藤枝市郷土博物館が行った）

古式の座り猫が特徴

招き猫は、古くから縁起物玩具として人気の高いもので、金運招福、招客万来、商売繁盛を願って買い求められてきました。藤枝でも招き猫の人気は高かったものとみられ、大小各種の猫雌型が揃えられて、練りものによる招き猫が盛んに作られていたようです。

初代七五郎から始められた招き猫は、最盛期が明治時代前期にあって、明治31年４月に雌型を新調した直後に人形作りを廃絶するまで三代目作太郎の代にわたって作られ続けていました。

伏見ないし名古屋（熱田）土人形から持ち込まれた原型が４点、木彫の原型が４点あって、それらから型取りされた雌型の組み合わせが10点分残されています。

原型の猫は、型取りのため招きの手の部分と耳を切り離し、木型を彫り込んだ窪みに松ヤニを詰めて雌型作りが行われています。雌型には墨書の目印が記されていて、大猫（高さ21.6cm・17.3cm）、「中猫」（高さ14.4cm）、「子猫」（高さ11cm前後）、「けし猫」（高さ９cm前後）の４種類があったことがわかります。

すべて左手をあげて招く「客招き」に作られており、形態は正面を向いて前屈みになった猫背型の姿勢に作られ、顔や手足の表現も現代の招き猫のようにデフォルメされていない古式の座り猫型の姿をよくとどめたところに大きな特徴をもっています。

浜松張子の招き猫（張子・浜松市）

坊ノ谷人形の招き猫（土製・小笠町）

現在まで製作が続けられている静岡県の代表的な招き猫。浜松張子の招き猫は、高さ11cmほどの右招き（金を集める）の小型品で、目元の紅と顔や体の陰に入った薄いピンクが特徴となっています。坊ノ谷人形の招き猫は土製（高さ20cm）で、三代目（故）高木亀次郎作による復活品。三河系の特徴をもち、腕と背にかかれた虎縞模様が目だっています。

静岡県の招き猫

県内では藤枝（練）をはじめ、静岡（張子・土）、小笠町坊ノ谷（土）、浜松（張子）で招き猫が作られており、静岡、清水では猫の首人形もみられます。

静岡では、安政年間の創業といわれる沢屋（杉本家）を中心に静岡ダルマ、祝い鯛や首振り虎、面などの張子、土人形が盛んに行われており、招き猫も作られていましたが戦災によって型のほとんどが失われています。中遠地方の坊ノ谷土人形は、明治18年に金谷土人形が持ち込まれてできたもので、高木家、山田家で昭和初期まで製作されていました。近年、三代目高木亀次郎さんによって伏見、三河系の土型から人形作りが復活し、虎縞模様に特徴のある三河系招き猫が作られていました。浜松張子は、明治初期に幕臣であった三輪永保によって創始され、「柿のりざる」「兎ころがし」など特色ある豊富な種類の張子が作られていました。戦災で消失し、中断していましたが三代目二橋志乃さんによって復活し、現在二橋加代子さんに受け継がれています。体全体に薄紅色をさした女性的な招き猫が継承されています。